

# 漢印彷彿

綿引浩一（滔天）

Koichi (Toten) Watahiki

秦漢時代は皇帝をトップとした官僚による強固な郡県制が確立した時代である。主君と臣下の従属関係を規制し、国家機構を維持するための、権威の象徴が各人佩帯の印章であった。従って、官印の印面の刻は厳正で少しの乱れも許さない独特の緊張感を湛えている。後漢以降は刻法の変化や社会の変化に伴い、草率な風も入り混じり多様な風格をみせている。

周知のとおり、古来より印人は、これらを範として表現の糧としてきた。やがて印以外の金石資料にも食指を伸ばして「印外に印を求めようになると、表現の幅は一気に拡がり現代に至っている。

近年の公募展などにおける篆刻作品は、大型化が進んで今や二寸角を遙かに超え、二寸五分（7.5cm）角が主流である。表現の発露としては自然の流れであろうが、反面、大きい故に大胆さが志向され、概して粗さが目立つようである。また、理よりも情を尊ぶ日本人の特質からか、字風も厳格なものより卒意を好む傾向が強い。

印は方寸（漢代の一寸は約23.4mm）のような小世界でこそ最もその良さが発揮されると思う。「方寸の藝術」と謳われる所以である。本来は繊細で地味なものである。派手な変化よりも緻密さ、秦漢印のような緊張感を失わないこと。落ち着いた風貌のなかで、力の均衡を保ち微かに響きあう、そんな静かな佇まいが風韻を生むのではないかと筆者は考えている。

近頃、まとまった作品発表の機会に恵まれ、態を変えて数顆制作するなか、秦漢印に效法した作を入れようと思いついた。掲出の作がその一例である。ここに腐心の詳細を記してみたい。

漢印の典雅な味を狙った作で、河井荃廬翁の晩年の風韻が宿ることを願ったものである。やや小ぶりの印材で、ごくオーソドックスな字形を用い、刀意を抑え気味に奏刀した。平方正直に固執しすぎると堅苦しくなるため、転折に潤いを持たせ、手脚のこなしにも小

篆の筆意を入れていくことがポイントである。

元来漢印の章法は、太さと間隔を均等に保ち、方形に効率よく収めるための工夫がなされている。点画が少なければ増画・屈曲させ、多ければ減画して繁簡を調整し、空間を満遍なく埋めていくことが基本である。しかし、これに忠実すぎてもまた単調となる。

「味」——「口」の縦画を背勢に構えて重心を落とし、「未」は吊り上げて下部に空きを作る、三横画、分間の均等を崩して一息詰める。

「道」——「辵」は窮屈にならぬよう中央をそつと空け、脚を傍の下部まで潜り込ませて足元を幽かに空け、横画の多い「首」は分間が揃い過ぎぬよう中央部を詰めて接筆させる。「味」と同様に偏旁に接点を設けた。

「守」——左右対象で単調な字形ゆえに、「寸」の転折のこなしがポイント。下部に設ける大きな空間を意識しつつ、手部のたたみに動きを与える。分間は上部を詰めて下部を緩やかに。「宀」を背勢に構え内部に緊張を与えた。

「眞」——真四角でつまらない姿だが、前三字と同様、足元の余裕を意識する。横画の分間を思い切り詰め、接筆による潰しで充実させ、幽かに残った朱で緊張感を演出する。しつこいまでの横構成、上・下の筆画に息抜きを求めた。

上部二字の中央に並ぶ五本の垂線、個々の表情に配慮して単調を避け、繁画の下半二字はやや背を高くして安定させた。全体を満白にまとめるが、実線の白と潰しによる虚白を設けて重厚に、起収筆の処理にも変化を与え鋭さを強調してみた。響きあう力を逃がさず閉じ込めたい。そして最も留意したのは適所に配分した空き、空間の朱である。印は字形だけでなく空間の調和も重要である。果たして拙作は美しく呼応しているだろうか。

純然たる漢印の風は、作品化するには困難であると再認識した。斉整ゆえに単調に陥りやすく、敬遠しがちであったが、原点に立ち帰る良い機会になったと思っている。

・印文 味道守眞

・出典 後漢書

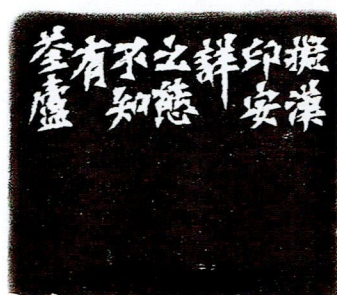
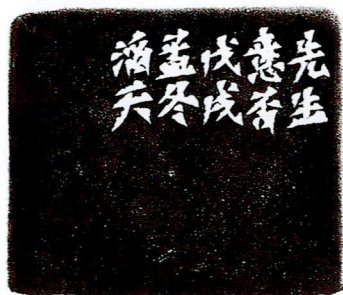
・側款 擬漢印安詳之態。不知有荃廬先生意否。

戊戌孟冬。滔天。

・印影寸法 約一寸五分 縦4.4cm×横4.3cm

・印材 ラオス産凍石 獅子鈕

・印泥 上海西泠印社製「潜泉光明硃砂印泥」



4.4cm × 4.3cm (印影寸法)